

四諦と十二緣起(三)

橋 浦 寬 照

前回まで四諦の間で苦集は論理的性相の關係滅道は時間的因果の關係であると見たがこゝで四諦と十二緣起の關連について考へる。阿含に「無明によつて行あり行によつて識あり識によつて名色あり乃至生によつて老死憂愁苦惱あり」と説かれる十二緣起は内容の上から諸種緣起の代表として四諦と共に釋尊成道時の根本法とされてゐるが從來四諦とこの十二緣起とは互に相應の關係にあるとして十二緣起の順逆兩觀が四諦の苦集と滅道に當てられてゐるのである。今これらについて其の所謂四諦の苦集二諦と十二緣起の順觀では、諦諦の第一苦は老病死等凡ては苦であること第二集は其の因で渴愛が説かれてゐるとするこれを集諦からは我々は渴愛を持つてゐるその渴愛を因として凡てが苦であることと云うことであると、十二緣起の順觀は「無明によつて行あり行によつて識あり乃至生によつて老死憂愁苦惱なり」と無明より老死等の苦に次第されるが、これは右の集から苦を説いて渴愛によつて凡て苦ありと言はれると同じであるとき、四諦の滅道二諦と十二緣起の逆觀では、四諦の第三滅は苦の滅第四道は苦の滅に至る道で滅と道とは因果であるがこれに十二緣起の逆觀「無明滅すれば行滅し行滅すれば識滅し乃至生滅すれば老死愁憂苦惱滅す」を當てるのである。

然しこゝでこれら四諦に十二緣起を配する内容を見るならば、

四諦の苦集は所謂因果であるとするから、これに配する十二緣起の順觀も因果でなければならぬが苦集の間は渴愛が因で苦が果である、故に十二緣起に於ても其の老死等の苦を果とすれば無明乃至生等の十一支を老死等の苦の因となし、四諦の滅と道とはまた因果の關係であつて道は因、滅は其の果であるが、これら滅道の因果に十二緣起が當てられ、こゝでも老死等苦の滅を果とし無明滅乃至生の滅等十一支の滅が其の因となることになる。こゝで十二緣起逆觀の老死等の苦滅が四諦の滅になることは當然であるが、この際、無明滅等十一支の滅が四諦の道に當てられることになつて、こゝに明かな矛盾となるのである、何故ならそれは無明滅等十一支は明白に自體滅であつて四諦の道ではないからである、而もこれら十一支が滅であれば其等もまた老死等苦の滅と共に四諦の滅に相當するものでなければならぬのである。

蓋しこれらはもとより十二緣起の兩觀を四諦に配すること自體が不自然であるからであるが今はその理解のために先づ何故に十二緣起逆觀の無明滅等十一支の滅が四諦の道に當てられるかと言ひに逆觀の老死等苦の滅が四諦の滅に相當するから老死等苦の滅の因たる十一支の滅は當然滅の因の道に配せねばならぬことになるのである、そしてこの老死等苦の滅を四諦の滅に無明滅等十一支の滅を道に配することは右の如く十二緣起逆觀を因果としていふことである、即ち逆觀の内容を因果とするからこれを滅道の因果に配して老死等苦の滅を四諦の滅とし無明滅等十一支の滅を道に配することになるのである。而も十二緣起の逆觀を因果と見るとは己に苦集二諦に十二緣起の順觀を配してゐる如く、順觀を因果としてゐるからで順觀が因果とされるから逆觀もまた因果とされてくるのである。

る。しかも十二縁起の順觀が因果とされてこれが四諦の苦集に配されてゐるのは、それは十二縁起順觀の内容が仔細に考慮せられて因果とされそれが苦集に當てられたものではない、順觀の内容はここでは檢討されることなくただ苦集と十二縁起順觀とは同趣意である、而も苦集は因果である、故に十二縁起の順觀も因果でなければならぬとする考へに基くものである。而も苦集を因果とすることは始め集を因とするから苦が果とされ苦集の間が因果とされたのである。

然し前回までに見たが集の因は妥當でなくそれは寧ろ理由根據の義で苦集の間は因果ではない、十二縁起の順觀も苦集と同趣意であるから因果ではない、隨つて四諦の苦集を因果としてこれに滅道の因果を合せ、これらに十二縁起の兩觀を配する考方もまた誤りであることになり、其の説には右の如き矛盾が起るのである。然るに従來十二縁起の兩觀が四諦の各二諦に相當するとされてゐるこの説は、いまだ學者の間に何の檢討も加へられず既定の理論の如くに用いられてゐること自體反省されなければならぬのであるがしかも宇井博士も「蓋し十二縁起の順觀は苦蘊の集を明かにするもので四諦の苦集二諦に相當し其の逆觀は苦蘊の滅を示し四諦の滅道二諦に當り趣意に於ても同一なる説であるが云々」と言はれてゐる程である。

偕で以上に於て十二縁起を四諦に當てることの不合理なることを理解したが而もこの誤りは更に道の解釋にも延いては根本思想の究明にも誤解をもたらすことにもなるのである。故に今は新しい立場から四諦と十二縁起の連關を考へねばならない。

十二縁起の内容は時間的か論理的かは多くの學者に論及せられ宇井博士和辻博士等は論理的に解するを正しいとされてゐる、勿論こ

れは論理的なものかと考へられるが兩博士等は論理的とされ乍らも其の説かれるところは前後必ずしも一貫されてゐないから、これも後にふれるが十二縁起が時間的か論理的かは今は經自體に見る。

先づ十二縁起の第一二支について、

第一二支の間は「無明によつて行あり」と言はれるがこれは無明がなければ行なく行のあるところ無明があると言ふことでここでは無明と行の間は時間的にも論理的にも考へられる。然し次に第二三支の「行によつて識あり」に於てこれを第一支に關連せしめて「無明によつて識あり」とも言い得る、何故なら他の七支九支等縁起には各々三支乃至五支が省かれてゐるが其等縁起も趣意はこの十二縁起と同じでなければならぬし其等縁起支の多少はたゞ苦の生起の説明の廣狹にすぎないからである、この無明があるから識があると言ふ時行は省かれてゐるが識は行によるから識自體に行を含むと言ふことである、このことは又「行によつて識あり」と言ふ時行の外に別に識があるのでなく行をそのものが識となるのであるから識となれば行そのものは識自體に含まれるといふことである、これに基いて第一二支の「無明によつて行あり」とは無明と行には別個のものでなく無明が行となつて現はれることで無明と云ふ時にそれ自體であり行とは無明がかくれて行となる。即ち現はれた面が行で内容は無明である。そうすると、斯く一體の無明と行とは時間的なものではない、而して第一二支の關係は其のまゝ、行識、識名色等各支の關係であるから無明乃至老死等苦の十二縁起支全體は論理的一體的關係といはねばならない。

斯く十二縁起各支の間は論理的に考へられるが偕でこの十二縁起と四諦とは如何に連關するか次回にこれについてのべる。